

序

高度に発達した工業化社会の生産は、各人の行為が専門分業化され、それが集中総合化されて行なわれる。この場合、全体の整合性がとれ効率を上げるためには、計画がすべての基本となる。またコスト分析、タイムスケジュール、組織作りが綿密に行なわれ、計画をそのとおりに進める管理手法が重要になり、PARTとか組織論の研究が盛んになる。

こうしたことは、直接の生産行動だけでなく、その他の社会的諸活動もそういうふう運営されるようになる。

しかしそのためには、一般的に言って、計画の基になっている目標についての予測が、結果的にできるだけ狂わないことが必要である。また一方このような計画管理の過程で働く個人の資質としては、とくに緻密性と忠実性が要求されよう。

さて最近の社会的諸情勢は、よくいわれるように予測が難しく、不確定なことが多い。つまり過去の確定的データのみによる計画を立てても、なかなかそのとおりにならない場合が多くなっている。

こうしたときは、当初の計画のみに忠実である、上から指示されたことだけをやるということでは、不測の変化に十分に対処できないであろうと思われる。とくに未来を開く研究に従事する者にとっては、そういうことがいえる。

このとき必要なのは豊富な経験から生み出される直観ではなからうか。そして未知を探す好奇心と、未知へ踏み込む胆力ではなからうか。

勿論、周到に計画を練り、注意深くそれを実行して行くことは、大抵の場合実りの多いやり方である。しかし、そううまく行かないことがあっても、それで途方に暮れるようでは困るのである。そうしたときにものをいうのは、教育された知性よりも、かえって人間のもっている原始的な心であって、今日の整備された管理社会の中にあっても、研究者はそうした心を失わないで欲しいと思う。

1980年10月

清水建設株式会社研究所長

工学博士 烏田 専 右